

「自ら学ぶ」に

特集

学習意欲が低下していると言われる現代の高校生を、「自ら学ぶ」ように導く学習指導の工夫とはどのようなものか？

導く学習指導

生徒をどう学びに向かわせるか

授業で生徒を引き付ける

興味をそそる授業の工夫 討論や実験・実習など、生徒自身が活動する場を積極的に盛り込む。また、インターネットなどを活用し、生徒が関心を抱きやすい話題を授業に散りばめる。

分かる授業の工夫 生徒による授業評価などを用いて、生徒たちが授業をどれだけ理解できたかを検証し、授業計画に反映させる。より生徒に合った授業を習熟度別クラスなどで実現する。

理解しやすい授業展開 授業に先立って、単元の全体像をつかませるようなオリジナル教材を生徒に配付する。また、重点ポイントを明記した学習プリントを作成し、生徒に取り組ませる。

学び方を提案する

学習習慣を定着させる 学習台帳などを通して、自学自習の達成感を生徒が味わえるようにする。毎日の学習記録を記入させ、学習状況を確認していく。

自学自習の方法を提示する 予習・復習の実践例やよいノート、よくないノートの例などを具体的に生徒に提示する。さらに面談を通して、生徒個々の学習スタイルを検証していく。

学習目標を明確にする できるだけ具体的な短期で達成可能な学習目標を設定させる。そして定期テストや模試の後に、生徒自身に今後の改善点を考えさせよう。

学び環境を整える

前向きに学習に取り組む集団を作る 放課後、教室での自習を呼び掛けたり、英語のリスニングテストにクラス全員で取り組むなど、全員で学んでいく雰囲気を作る。

生徒が気軽に質問できる環境を作る 教科別に質問を受け付ける日を設定し、教科担当のどの教師に聞いてもよい体制を作るなど、生徒が教師に質問しやすい状況を作る。

生徒との信頼関係を強固にする 1人の生徒を複数の教師で支えていく。生徒の学習、生活状況を詳細につかんで指導することが、生徒の教師への信頼を高めていくことにつながる。

「学び」に背を向ける生徒たち

生徒の学習意欲の低下を実感する教師たち

生徒の「学び」の変化を語る教師の声

学習に対する意欲というよりは、学習習慣そのものがなくなっている。授業でやり残した問題を次までにつけてくる生徒が、最近ほとんどいなくなった。授業に集中している真面目な生徒も、課題としてこちらから指示をしないと家庭学習をしてこない。

(愛知県T高校・O先生)

私が担当している世界史の授業では、生徒たちは黙々とノートは取っている。しかし、ある出来事の前関係やその時代背景を考えながらではなく、作業としてノートを作成している様子。「考える」という活動をしていない感じがする。10年ほど前と比べて、質問の質も格段に落ちた。

(千葉県C高校・K先生)

文章を読む、計算問題を解くといった基本的なことで手間取る生徒が増えており、同じことを教えるのも以前に比べると時間を要するようになった。また、英語や数学は予習復習が特に大切なのだが、自発的にできない生徒が目立つようになっている。

(福岡県K高校・I先生)

近年、家庭での学習時間の減少が見られる。特に1、2年生にその傾向が顕著。生徒たちには中学校時代に塾で学習する習慣が付いてしまったためか、自宅の机に向かって長時間学習することができなくなっているようだ。自学自習の大切さに気付いていない生徒が多い。

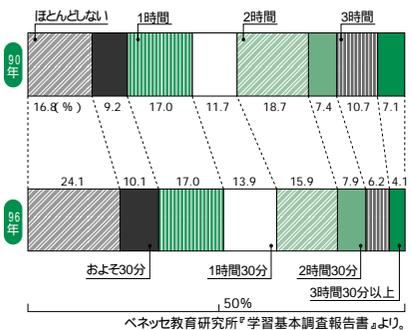
(茨城県T高校・N先生)

受け身な姿勢が学力低下にもつながる!?

与えられた課題はこなすが、自ら積極的に学ぶ意欲が感じられない生徒が増えてきている。

これは今や多くの高校の教師にとっても、共通の認識になりつつあるようだ。今回編集部が行ったアンケートでもほとんどの教師が、最近の生徒について「家庭学習時間の減少を実感する」を受

平日の家庭での勉強時間(高校生)



け身で授業を受ける姿勢が目立つ」といったことを指摘していた。「家庭学習時間の減少」は、データにもはっきりと表れている。左上の表は高校生の平日の家庭での勉強時間をグラフにしたものだ。96年には約4人に1人の生徒が「ほとんど勉強しない」と答え、過半数の生徒が「1時間以内」となっている。また、「受け身の授業態度」については、「1時間集中できなかったり、黒板をただ写しているだけ」という感じの生徒が増えている(北海道・A先生)など、日々の授業の中で実感している教師が多いようだ。こういった状況の中で、多くの教師が授業形態や具体的な指導方法における創意工夫を図っているようだ。最近一方的な講義形式のスタイルをやめてディスカッションを取り入れる教師や、生徒の進度に合った授業展開をするために、習熟度別授業を導入する学校も目立ってきているが、これらもその例と言えよう。

近年、学習意欲の低下と同時に、高校生全体の学力低下を懸念する声も高まっている。意欲と学力は相関性の高い関係にある。高校生として必要な学力を確保するためにも、生徒の意欲を学習へと導くための仕掛けが、これまでに以上に重要になっている。

授業で生徒を引き付ける

50分程度の授業に集中できない生徒が増えていると言われるが、生徒にとって分かりやすい授業や興味を喚起する授業をきつかけに、生徒が意欲的に学習に取り組み始めるケースは少なくない。生徒を引き付ける工夫の実践例を紹介する。

興味をそそる授業の工夫

実践例

福岡県A高校・Y先生
3年理系クラスの生物の「昆虫ホルモン」の分野で、生徒たちに授業を行わせています。「昆虫ホルモン」は入試ではそれほど重要視されていませんが、生物に対する関心を高めるには格好の分野です。授業に先立って、生徒の中から教師役を選出し、30分を目安に授業計画を立てさせます。教師役の生徒もその授業を受ける生徒も、興味を持

福岡県K高校・A先生

って授業に参加しており、質問も活発に出ています。授業を見ている私にとっても、生徒の理解度や考え方が分かり、得る物が多いんです。生徒の方が我々よりも平易な言葉での説明を心掛けるためか、教え方について生徒から学ぶことも少なくありません。確かに授業効率は悪くなりませんが、他の分野での実施も検討していきたいです。

解法を、黒板に書かせるような時間を設ける。国語の論説文であれば、著者の論法に矛盾はないだろうか。なぜなら先生はこう思うが……と問い掛けることで、生徒に議論するきっかけを与える、などだ。

福岡県のF高校の教師は、英語の授業で席が前後あるいは左右の生徒同士で、教科書の内容に関する質疑応答や、新出文法の意味を文脈から類推させるなどの作業に取り組ませている。

理科でも、教科書に載っている実験をそのまま再現するのではなく、実験方法について生徒にアイデアを出させるなど、教科書と黒板だけで進めるのではない授業法は考えられる。講義型の指導をすべてなくすことはあり得ないが、生徒が自分自身の思考の変化、成長を体感できる場を授業に適宜盛り込んでいきたい。

最新のトピックを教材に

生徒参加型の指導は時間がかかるため授業の進捗を遅らせる可能性があり、毎時間やるのは難しいかも知れない。だが数回に1回の実施でも、生徒は緊張感を持って授業に臨むことになるし（集中していないと他の生徒と共同作業ができなくなってしまう）、主体的に参加しているうちに教科書の内容に対する好奇心も養われてくるはずだ。

また、教材や教具の工夫も、生徒の意欲を引き出すのに有効である。富山県のD高校では英語の授業で、インターネットから最新のトピックを取り寄せ、生徒に読ませて感想を書かせるといった試みをしている。題材が現在進行形のものだけに、生徒の関心も高いと言った。自分の学んでいる内容が社会とどうかわっているのかを知ること、学習に対する動機付けともなる。

生徒参加の授業スタイルへ

最近の高校生は、小・中学校時代にディスカッションや調べ学習などの体験的学習を経験している者が少なくない。実際、「練習問題をコソコソやるのは苦手だが、自分の発想を自由に話すような機会だと生き生きしている」と

いった教師の声をよく耳にする。教師が一方的に話すだけの授業形態を見直し、生徒が参加する授業へと移行することで、生徒の意欲を引き出すきっかけにすることはできないだろうか。

例えば数学なら、問題を一つ解くにしても、いろいろな解き方を生徒同士で話し合い、グループごとに出てきた

分かる授業の工夫

実践例

福岡県A高校・Y先生
本校では今年度から、授業後に生徒へのアンケートを行っています。授業に集中して取り組めたか、内容はよく理解できたか、板書は分かりやすいか、スピードは適度かなど、生徒による授業評価を活用して、授業をよりよくするための教師間での検討の指針としています。

生徒の理解度を把握する

分かる授業を実現するためには、常に生徒のレベルに合った授業を心掛けることがポイントになる。そのために、福岡県のA高校のように生徒による授業評価を実施している高校も見られる。

これは、生徒がどれだけ学んだ内容を理解できているか、を把握するのに役立てることができる。また定期テストや模試も、生徒がどのような問題にまずいっているかを確認できる絶好のチャンスだ。苦手な部分についても一度教えることで、生徒の理解度を高めることができる。

また、高校3年間のうち、最も生徒が「勉強嫌い」になりやすい時期は1年次だと言われている。中学校と高校

との学習レベルにギャップを感じたり、スピードの早い授業に付いていけない生徒が多いようだ。そのような生徒には、教師が中学校の教科書の内容を一読した上で、新たな単元に入る前にはどこまで生徒が中学校レベルの内容を理解しているか、小テストなどで確認することも一つの方法である。ちなみに福岡県では、高校1年生がつまりき

やすい弱点部分を補強して、高校での学習にスムーズに移行できる「つなぎ教材」を中・高の教師が連携して開発している（本誌99年10月号参照）。

習熟度別授業で丁寧な指導

生徒の状況に応じた授業を展開するためには、教科ごとの習熟度別授業も効果的だ。「習熟度別は、成績下位層の生徒の意欲を低下させるのでは？」と

理解しやすい授業展開

実践例

福岡県K高校・I先生
本校では、物理の授業を、基本的な事項を中心にした教科書の確認、基本・標準的な問題演習、入試問題演習の3段階に分けています。つまり教科書の最初の単元から最後の単元までを、基本から応用の段階に分けて3回繰り返す形になるわけです。

予習プリントを活用する

新たな単元に入るとき、生徒もこれから学ぶ内容がある程度把握しておい

た方が、取り組みがスムーズになる。だが、予習の仕方は生徒によって異なり、理解の深さにもどうしても差が出てしまう。そこで生徒にあらかじめオリジナルの予習プリントを配り、各自予習をさせた上で授業を行っている高校がある。授業前に予習をして特に難しかった所を生徒から聞き、そこを重点的に教えることで効率的な授業を実現できるようだ。

また、福岡県のK高校のように、単元の全体像をつかませることに留意した指導も見逃せない方法と言える。例

いう危険は確かにある。しかし、大分県のある高校では下位層のクラスで少人数教育を行うことにより、生徒が教師に質問したり、教師が個々の生徒に声を掛けやすい環境を作っている。同校が行った生徒へのアンケート調査でも「授業中の意欲 やる気」や「授業が分かりやすい」などの項目で、通常授業よりも習熟度別授業の方が高い評価を得ている。下位層の生徒にも分かりやすく魅力ある授業を実現できているようだ。

例えば、日本史や世界史ではオリジナルプリントを中心にして、歴史の大きな流れをつかませ、その上で詳細を理解させていくのだ。

なお、このようなオリジナルプリントなどを開発した場合、作成した教材や問題はパソコンにデータで保存しておく、教科担当全員で共有でき、より効果的である。

特集

「自主学習」
導く学習指導

学び方を提案する

学習習慣を定着させる

実践例
 私（茨城県T高校・N先生）のクラスでは、「スーパー学習記録表」という記録用紙を作って、生徒に配付しています。1か月1枚の記録用紙で、1日ずつ、その日に予定している家庭学習の内容、実際に勉強した時間、その反省を記入していきます。あらかじめ私が定期テストなどの学校行事を書き込んだものを、3か月先の分まで渡しています。その日の学習内容を自宅に帰ってから考えるのではなく、3か月という長いスパンで先を見通しながら計画を立てるように指導しています。生徒は部活動や友人との遊びなどの予定も考慮しながら、それぞれ計画を立てているようです。回収・チェックはませんが、「プライベートの管理はしないが、アドバイスはする」という方針で生徒に接しています。

学習合宿で達成感を味わう

既に述べたように、生徒の家庭学習時間は年々減少傾向にある。中学校までは授業を聞いていればそれなりの成績を修めることができていた生徒も、高校では学習量も多く、進度も速くなり、そのギャップに戸惑う。また、与

えられた課題をこなすだけでなく、予習・復習といった主体的な家庭学習するには授業に付いていけなくなる可能性が高い。実際、高校の授業は、生徒が準備をしてきていることを前提に進められることが多いため、家庭での学習が定着していないと、授業自体にも影響を及ぼすことになる。

学ぶ意欲があっても、学び方が分からなくては壁にぶつか。逆に生徒自身が創意工夫して自学自習することの楽しさを知れば、自然と学習意欲が高まってくるはずだ。「自ら学ぶ」に導くための学び方指導が重要になってきている。

予習・復習の大切さを訴える機会としては、新入生オリエンテーションや学習合宿などがある。特に2泊3日程で行われる学習合宿は効果的だ。兵庫県のT高校では合宿の1日をすべて自習時間に充て、生徒にじっくりと机に向かわせる時間を作っている。その際、事前に自分で何を学ぶかを考え、学習計画を立てさせる。自習中は質問を受け付けず、1人で学習に取り組む体験をさせていると言っている。学習習慣が身に付いていない生徒にとっては簡単なことではないが、合宿を通して自学自習の達成感を味わってもらうことを目的としている。

記録表で生徒の状況を把握

また、茨城県のT高校のように「家庭学習記録表」を作成して、生徒に学

家庭学習記録表の例

国	数	英	理	地歴	他	合計
/ (日)						
/ (月)						
/ (火)						
/ (水)						
/ (木)						
/ (金)						
/ (土)						
1週間の合計						

1週間の反省・感想、先生への質問
 担任記入欄

自学自習の方法を提示する

実践例
 山形県K高校・K先生
 新入生に対して、授業が実際に始まる前にガイダンスを実施し、予習・復習の仕方、ノートの取り方、さらに副教材の使い方などをレクチャーしています。自学自習のノウハウを理解させると共に、「高校生になったら、中学生のときよりももっと自分で学ぶ意識を持つ」と生徒に呼び掛けています。

予習の仕方をアドバイス

愛知県のある教師は、「今の生徒は、書き込み式ドリルを与えられて、それをこなすシステムに慣れている。ノートを自分で作る習慣や、授業のまとめを整理することが未体験のまま高校にきているようだ」と語る。予習・復習の仕方、板書の取り方などの基本的な学習法の指導が重要になってきている。

指導の場として効果的なのは、やはり新入生オリエンテーションや学習合宿だ。その際に、先輩の予習・復習の実践例や、よいノート、よくないノート作りの例を示し、生徒が具体的なイメージを持てるように工夫している学校もある。また山形県のK高校では、

学習目標を明確にする

実践例
 埼玉県K高校・S先生
 各学期の初めに個人面談を実施しています。担任と生徒が話し合いながら、前学期の反省と今学期の学習計画目標を立てます。低学年の間はいろいろと教師の方でアドバイスしなくてはいけないのですが、学年が上がることに自分で弱点を分析し、課題設定をする力も付いてきています。

定期テストや模試を目安に目標設定

「英単語の語彙を3000増やす」とか「微分の応用問題を解く力をもっと付ける」など、生徒に自分の弱点を把握させ、より具体的な学習目標を持たせることはとても重要だ。生徒の目標

概ね把握できる。翌日の授業では、実際に見た生徒の予習法を例にしながら、望ましい予習の仕方を指導している。定期テストや模試も、生徒が学習スタイルを見直すきっかけとなる。成績が伸びずに悩んでいる生徒には、テスト前などに積極的に声を掛け、学習法の相談に乗る。それを契機に成績が伸

設定は、個人面談の場を活用して行われることが多い。その際、現時点での状況（苦手科目・分野は何か、なぜ苦手になったのか、これまでどんな学習をしてきたか、など）を生徒に把握させることが重要となる。それには定期テストや模試、さらには学習状況調査などの結果が参考になる。目標設定は、あまりに長期的だと先が見えず、生徒はやる気を失いやすい。定期テストや模試を節目にするのが適当である。

石川県のK高校では、定期テストの2週間前に家庭学習計画表を生徒に書き込ませて、担任がチェックしている。各教科で何をどこまで勉強するかといったことまで生徒に詳しく考えさせて

びれば、自学自習のコツをつかめると共に、意欲向上にもつながられる。また北海道のK高校では、国語・数学・英語の基礎学力などを測る「スターディーサポート」（学力や学習状況の調査を基にした個別指導支援システム）を実施、面談ではテスト結果と生徒のノートを見ながら、ノートの取り方、学習法をアドバイスしている。

いる。愛知県のN高校では、模試の前後に個人面談を実施している。模試の前に教師と生徒が一緒に目標を定め、模試後にその検証を行っている。また福井県のT高校では、「スターディーサポート」の結果を基にLHRを使って生徒に反省を書かせ、同時に今後の学習スタイルの改善案と学習目標を生徒に提出させた。そして後日、目標をどれだけ達成したか、再びLHRで各自に検証させている。生徒が自分で考えることで、自主性も養えると言っている。

特集 「自ら学ぶ」

導く学習指導

学ぶ環境を整える

生徒の学習意欲を持続させるためには、気軽に職員室に質問に行けたり、生徒同士がよい意味でお互いに競い合うような雰囲気を作る、といったことが欠かせない。学ぶ環境を整えることがポイントとなる。

前向きに学習に取り組む集団を作る

実践例

長崎県N高校・H先生
1時間目が始まる前の10分間を使って、1日1人ずつ読書発表をさせています。どんなものを読んで発表するかは、小論文試験のテーマに関連がありそうなものという基準だけ設けて、後は自由に生徒に選ばせています。発表では、生徒が読んだ本の要約と意見を述べた後、クラス全員で簡単な質疑応答をします。読解力や表現力の養成が

長崎県N高校・H先生

目的ですが、意見交換をすることで他の生徒の考え方が分かり、クラス全体のつながりが深まるという副次的効果もあります。知的な会話を全員で楽しむ空気がクラスに生まれ、読書意欲も高まっているようです。読書発表会は授業前のウォーミングアップとしても最適で、1時間目から集中して授業に取り組みめるようになりました。

プラスの流れを見逃さない

学習に対して意欲の高い生徒が他の生徒を引っ張り上げるか、意欲の低い生徒が足を引っ張るかで、クラスの雰囲気はまるで違うものとなる。周囲の仲間の影響を受けて、生徒の気持ちはプラスにもマイナスにも揺れやすいも

のだ。生徒の気持ちがよい方向へと動いている時期を見逃さないのが、学習意欲の高い集団を作るポイントのようだ。例えば、東京都のある教師は次のように語っている。

「昨年度、2年生の担任をしたのですが、2学期になった頃から、放課後も教室に残って自習する生徒が出てき

たんですね。私も時々顔を出して、勉強している生徒を励ましたり、学習相談に乗ったりしていました。そして、同時に他の生徒にも、SHRで『皆も残って勉強してみたらどうだ?』と呼び掛けてみたんです。すると、女子を中心にクラスの半数以上の生徒が放課後自習をするようになりました。教室では、生徒同士がお互いに教え合う光景が見られましたよ。成績のよい生徒も、他の生徒に教えることでより深く内容を理解でき、得るものが大きかったみたいですよ。」

学校行事を利用する

英語スピーチコンテストやデイバー トンクールなどの学校行事も、クラスの結束を強め、全員が学びへと向か

うきっかけ作りとして有効に利用したいものだ。

例えば、クラス代表の選出のための予選をしたり、スピーチの内容を皆で作成・添削したりすれば、漫然と行事に参加する場合よりもさらに盛り上がるだろう。そして、クラスが好成績を修めたときは、生徒の気持ちも充実感でいっぱいのはずだ。そこで例えば、「コンテストは終わったけど、クラス内で今後英語スピーチを続けてみないか」と提案すれば、生徒が乗ってくる可能性は高い。

また高校によっては、クラスごとの定期テストや模試の平均点、平均学習時間などを学級通信に掲載して、他のクラスと競い合わせるような仕掛けを作っている所もある。うまく機能すれば、積極的に学習へと向かい、その成果に目を向けようという雰囲気や、学年全体に生まれてくるだろう。

生徒が気軽に質問できる環境を作る

実践例 愛知県A高校・S先生

自習室で生徒が教師に質問ができる仕組みを工夫しています。月曜日は数学、火曜日は英語というように曜日ごとに教科を決め、担当教科の教師は決まった曜日と時間に自習室に赴き、生徒の疑問に答えます。生徒からも好評で、順番待ちの生徒が出ることもしばしばです。

教師の側から声を掛ける

意欲的な生徒は、疑問点をどんどん教師にぶつけてくるものだが、難しいのはそれ以外の生徒だ。「分からないことがあればいつでも聞きに来なさい」と言うだけでは、何をどのよう質問すればよいか分からない生徒もいる。そこで、教師の側から生徒が質問しやすい場を作ることが重要になる。

例えば授業の最後に用紙を配り、その日の授業で分からなかったことを書かせる方法もある。次の授業で、生徒がつまりづいていた部分に改めて触れることができるし、個別に生徒を呼んで指導することもできる。

また、「火曜と木曜の16時から17時の間に数学の質問を受け付けます」とい

実践例 富山県T高校・H先生

クラスの生徒一人ひとりに記録ノートを作って、学習態度や生活態度をメモしています。教科担当や部活動の先生からも情報を入手しています。個人面談の前や生徒の様子に変化が起きたときには、必ず読み返すようにしています。生徒との信頼関係を築くための大切なツールです。

生徒との信頼関係を強固にする

うように時間と場所を設定すれば、生徒も気兼ねなく教師を訪ねることができ。ただし生徒によっては「数学の先生は苦手だから質問しにくい」と言う者もいる。そこで教科のスタッフが全員で協力して、誰に尋ねてもよ

い雰囲気を作っておくことが必要になる。さらに、教室や自習室に時々様子を見に行き、残っている生徒には、教師の側から声を掛ける。そんな工夫を続けることで、生徒が質問しやすい環境が生まれてくることになる。

信頼関係を築いているかは重要だ。

教師と生徒が1対1で話す場とすると、まず挙げられるのは、年に数回行われる個人面談だ。だが、ある教師は「毎日面談だと考えている」と語る。

「学習面だけでなく、進路や部活動、家族関係などまで聞くようにしています。友人関係に悩んでいて勉強に集中できない、といったような問題を抱えていることが少なくありませんからね。今は心に問題を抱えた生徒が多いので、特にこういうサポートが必要です」

だが、担任1人でクラス全員を支えるのは限界がある。特に担当教科以外の細かい学習相談は容易ではない。そこで、担任と教科担当との協力体制が

山形県のY高校では、1年生を対象とした「学習会・質問会」を開いている。これは夏休み期間中に登校日をつけて、生徒が各科目の教師の所に理解できない部分の相談や質問に行くというもの。夏休みは自学自習が中心になるため、生徒には疑問や迷いが生じやすい。そこを補助するというのが意味でも、意義のある取り組みと言えるだろう。

不可欠となる。例えば担任から教科担当に、「あの生徒は、日本史の勉強法が分からなくて悩んでいるようだ」と一言あれば、教科担当が個別に助言するきっかけとなる。反対に教科担当の方から担任に、「最近、あの生徒は予習をしてくるようになった。今後伸びると思う」といつ連絡があれば、担任の個人面談も、より適切なものになる。細かい情報まで把握しておけば、生徒は「先生は自分のことをきちんと見てくれている」と思い、信頼感が高まるものだ。

特集

「自主学ぶ」

導く学習指導